

特42

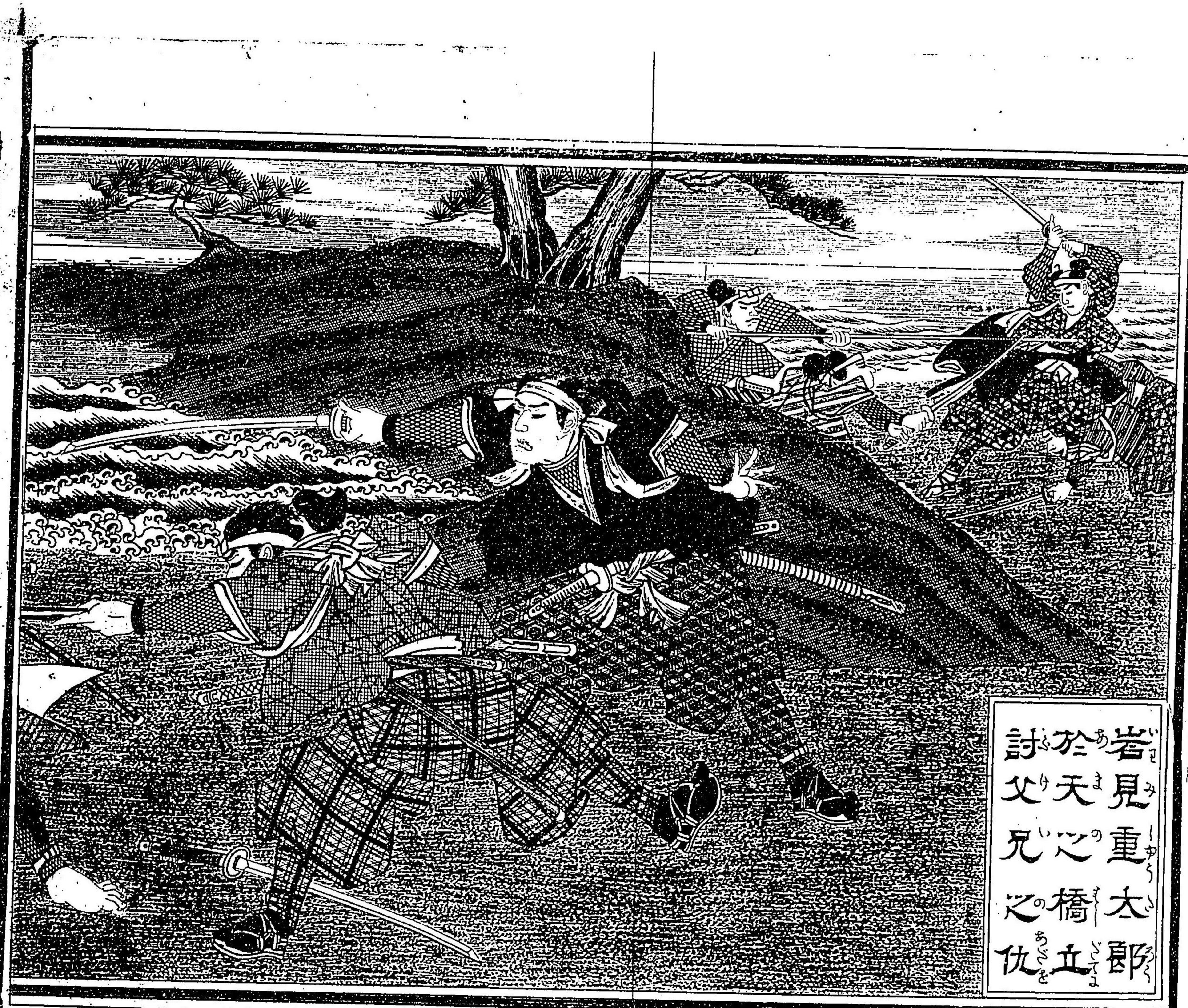
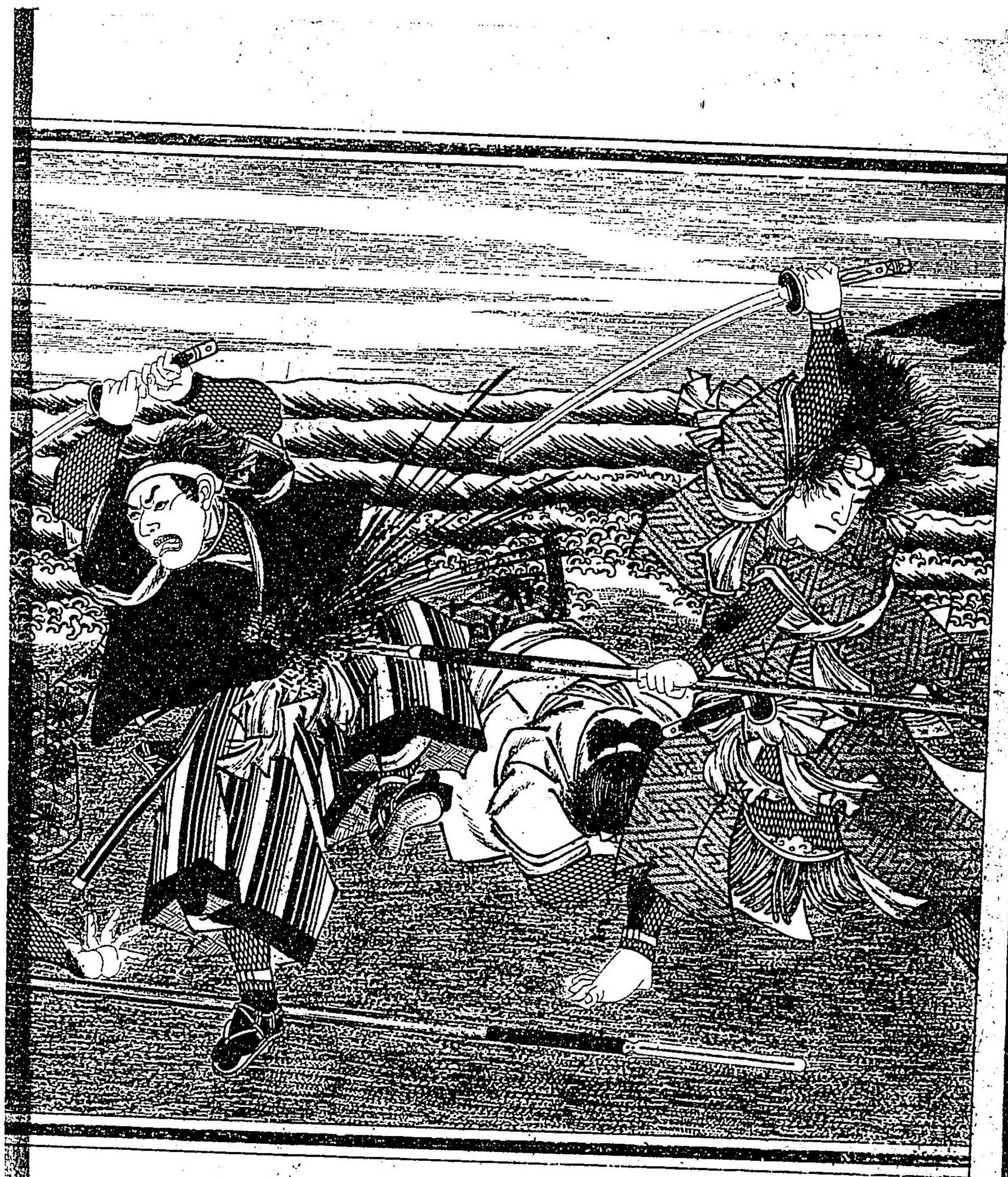
見重犬朗齋記

800



No. 7444





岩見重太郎
於天見之橋立
討父兄之仇







以て人の都を
 其手練を
 下しひ上々の首尾
 あり又七人の者
 失ひをどぐと御前
 元來彼の重太郎と臆病
 先達て八幡宮の境内にて臆
 散々お打ち負け重々耻辱を得る事と意



園遊を
 乃の重太郎
 其手練を
 下しひ上々の首尾
 あり又七人の者
 失ひをどぐと御前
 元來彼の重太郎と臆病
 先達て八幡宮の境内にて臆
 散々お打ち負け重々耻辱を得る事と意



今きけり先頃八幡の境内に貴殿
 對し失敬の始末仕り忍縮の至り幸か

野
 屋
 會
 村

北木の松の

山石身

十五

五



今日御城下の海老屋に各々集會
 致し居り御詫ふ一献差上座に傳へ
 どのて若見となかり同席に
 兼く謀りし事あるは大勢
 酒を進めける重太郎
 大不意に数杯を傾け
 其後其時打倒ける
 日くふふふと下月と
 跡をたゞし
 夜のお
 時
 其家
 立出

重太郎ハ
 七人物を
 言はず切
 懸る
 退き一刃を抜
 き先を進し
 曲りの筋先
 深く切れる所
 と右より左より
 一度お切込むる
 と此太刀風飛
 鳥のど紀あ
 かり前(一)

現 後乃ふ隠も千變萬化秘術と尽し終不残切らぬ宿所(帰)りも由目付(届)けま早速檢使の役人出張は死びといち改めらる皆藩中の掛あとい驚きつるも各前を



秘 此由殿言上を不景かふも驚あひ老臣評義の上重太郎ハ切とあり然ま多勢を切ひををあり永の暇とあり御手元金百円と給りけ難有頂たい父母兄弟及ひ薄田寺殿とつりあり。



岩見

岩見重左衛門家
御衆込ふ相
成りける故家中
の悦び大方か
或日秀秋公の
学鋸法の師廣
瀬軍蔵とよ者
岩見重左衛門と
道の試合兼重
の向善仰付れ
ける若見の為
悉々聴きとし
か多と意恨
思ひ大川公左
の西人とも
重左衛門の他出



重蔵
左馬之
の天下
聞ふる博
遊久あり重蔵
の手とり兄弟
者の身のうと聞て
俣小捨置不便な
とて幸ひ此宿の若
屋太平八知る人れ
の者太平方へ
養生の事
の手取り
と懸り
用まで江戸

七

と何ひかけらふも
暗殺し三人等し
筑前と立のきつふ
より重蔵おはか
致きたる物し
法野邊送りし
夫より仇討の願書
とあり許可と受け
重蔵おは国許と
立ち大坂出京師
と探り夫より東海
道と下り徳川家
の城下武蔵の江
戸小判板橋宿
の繩手ふ差り
頃八日もた



出

十





山

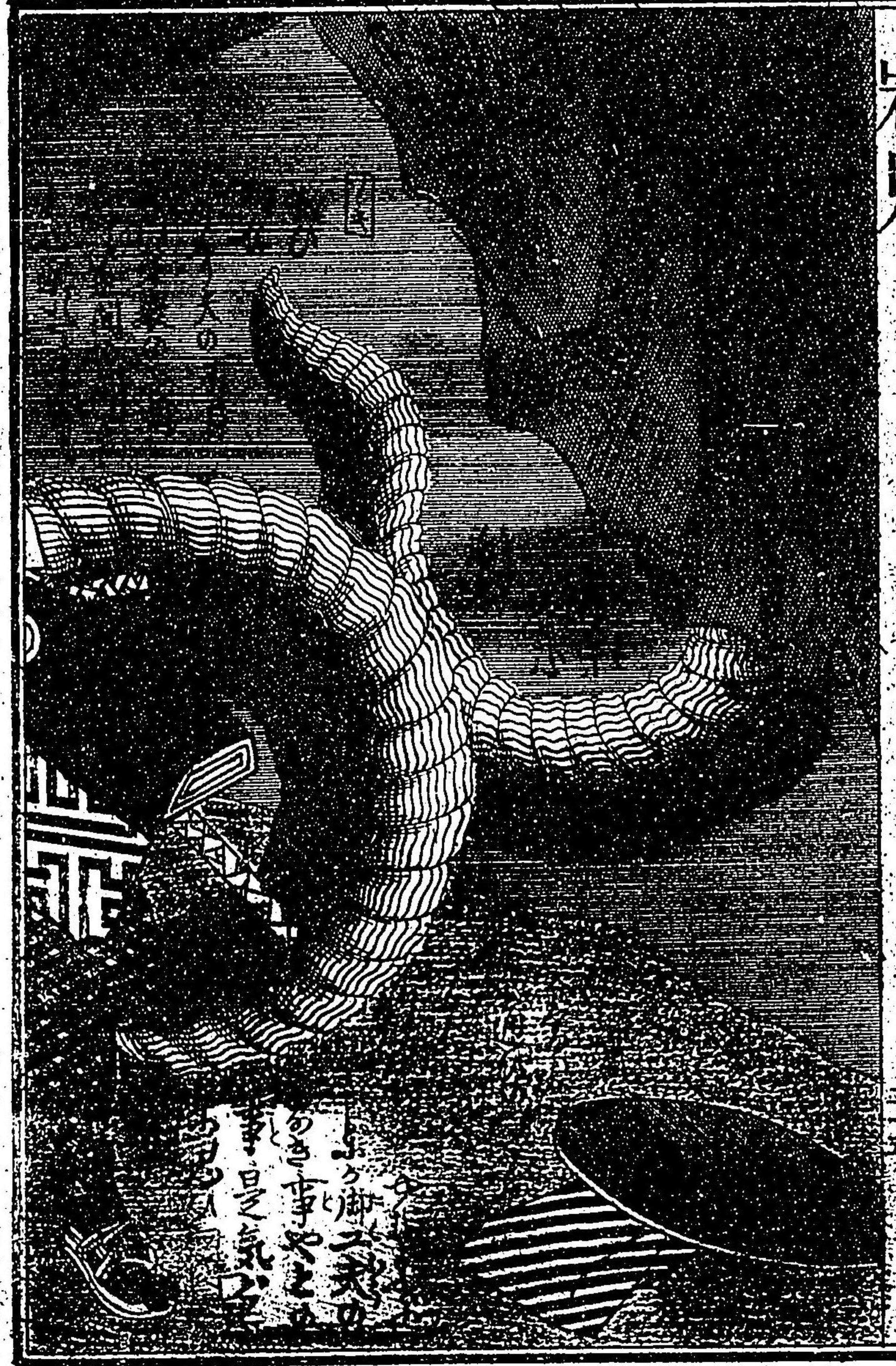
三十三

六



岩

三十三





山形

有るはとてきく重太郎
 出て彼の怪物と仕留
 大狸あり

敵の在家
 奥不知
 去り同国
 人見御供の
 助けてその怪物

武
 手

三



山形

夫より漸々街道
 出富山の城下小着一郷
 士角部虎之助方小一
 ける小此家小近來

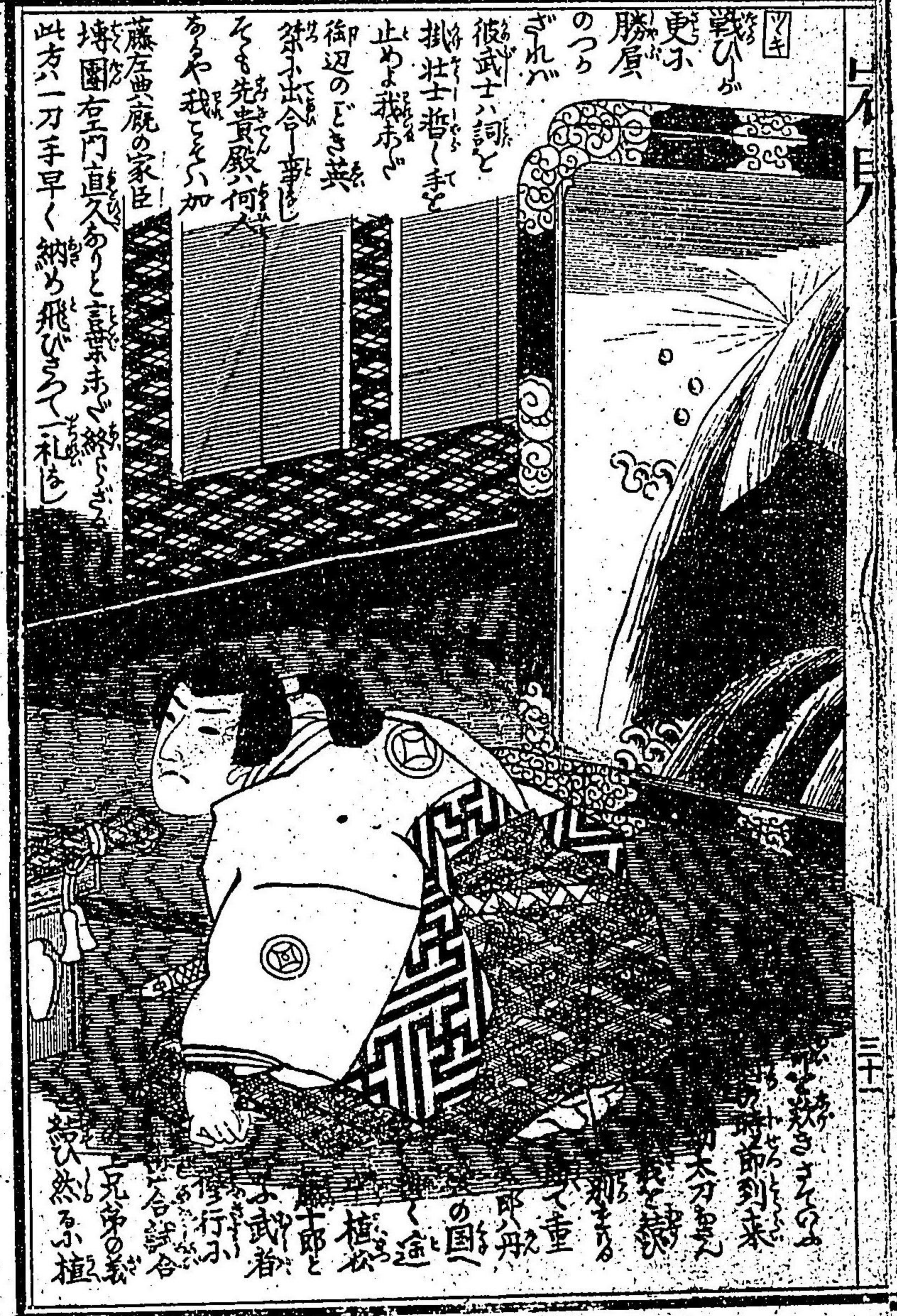
敵
 体
 武
 手

二十九



日外や脚身の為め不致
の高恩詞少遠くは只今共不
用捨不致しはしりも真入

松久咄し小丹後言
天者四郎との三人の切道
の中村式部少輔
人赤堀主膳鳴尾
身の手なる敵をんと赤小重
喜は



藤左典麻の家臣
澤園右内直入ありと喜
此方一刀手早く納り飛びさうて一礼は

御辺のいさ
御下合一華
そも先貴殿何
あや我とさ加

兄弟の
合
行
小武者
植
の
重
来

四ノ敵大... 廣瀬徳永の... 討つて... 宿を取奉行... 討の願書... 半の小道理... 家来と惜... 三人加勢... 十百大の橋立... 仇討の... 汰ありけ... 何万人加... とも仇と討...



三十三... 敵大... 廣瀬徳永... 討つて... 宿を取奉行... 討の願書... 半の小道理... 家来と惜... 三人加勢... 十百大の橋立... 仇討の... 汰ありけ... 何万人加... とも仇と討...

植松藤兵衛... 那虎之助の... 此由と... 人との... びその... 十百大の... 土官の... 部植松... 寺の... 敵大川... 敵の加... とひの... 備小... 大切... 多...



三十三... 敵大... 廣瀬徳永... 討つて... 宿を取奉行... 討の願書... 半の小道理... 家来と惜... 三人加勢... 十百大の橋立... 仇討の... 汰ありけ... 何万人加... とも仇と討...

明治二十二年八月印刷 八日...

明治二十二年八月出版
著者 澤久次郎
發行者 澤久次郎

